

2024(令和6)年5月31日



令和5(2023)年度 卒業式・修了式 式辞

岩手保健医療大学 学長 濱中喜代

●本日晴れて、岩手保健医療大学学位記授与式を迎えられた学部生81名、大学院生2名の皆様、誠にありがとうございます。岩手保健医療大学の教職員一同および在校生を代表して、心からお祝い申し上げます。また、卒業のこの日まで皆様を支え、励ましてこられたご家族やご親族の方々にも心からお祝いを申し上げます。(中略)

●制限や心配の多いなかで勉学に励み、国家試験という難関に挑み、卒業というこの日を迎えられたことは、皆様の毎日の積み重ねの成果であり、その努力に敬意を表したいと思います。大学院生の方々も授業はほぼ予定通りできておりましたが、研究のためのデータ収集等においてご苦労があったことと推察いたします。そのなかで修士論文作成を成し遂げられたことは大変意義深いことであり、今後大きな力となることでしょう。

●学部生の皆様は進学する3名を除いて、この春から看護師・保健師となり、職業人として歩み始めることとなります。これからは職業人として患者様や利用者の方々のケアすることになります。10年以上前から研修制度が義務化され、新人研修等はそれぞれの職場で丁寧な計画・実施されています。とはいえコロナ禍で実践的な学びが少なかった分、チームの一員として仕事をしていくことは相当大変なことと思われまます。先輩たちも厳しい状況下で元気に活躍しておりますので、皆様も本学で学んだことを活かし、自分自身を活かし、自信をもって実践の場に臨んでほしいと思います。大学院生の皆様は1名が本学の専任教員として、1名は地域の保健師として今後も活躍する予定です。皆様の未来が偉多いことを心から願っております。

●さて、本学で大切にしていることに「ケア・スピリット」があります。自ら進んでケアに向かう姿勢と定義しています。大学・大学院のなかで涵養：自然にしみこむように養成することを目指しておりますが、授業等を通して、皆様の内面に深く備わってきていると実感しております。

特に4年生の臨床倫理や大学院の1年次の「臨床倫理特論」の授業では実習や臨床体験を振り返り、丁寧に学ぶ機会がありました。ケア・スピリットの自己評価尺度の項目として①人間尊重、②共感的態度、③与益、④ケアの社会性、正義・公平性、⑤向上心、⑥自己効力感がありますが、学部の皆様は人間尊重と共感的態度の得点が高かったですね。大学院生の皆様はケアの社会性、正義・公平性と向上心の得点が高かったです。

●相手の最善を考えて、ケアするには、専門的な知識の裏付けと技術が必要です。「ケア・スピリット」は生涯かけて完成させていくものです。皆様の今後の看護実践・教育実践の中でさらに進化し続けるものであり、またそれらを支えるものにもなると思います。これからどうぞ大切にしてください。

●ここで1つエピソードを紹介いたします。私はこれまで様々なご家族と難病のこどものキャンプや家族会の会合の託児ボランティアを通して、お子様の世話をさせていただくことが多くありました。(中略)その時に感じたことは人の世話をすることには一番大切なことは相手に対する「思いやり」なんだということです。医療には全く関係のないお仕事をしている方が寝たきりのお子様のお世話をそれも継続的にされているとお聞きして、頭が下がりました。「思いやり」コンパッション(compassion)はラテン語で「一緒に苦しむ」という意味であり、「他者の苦痛を共に感じる」という語源であることを看護倫理の講義で学んだことを覚えておきますか。私たち看護職者は専門的な知識を究め、看護の技を磨いていくことがとても大切ですが、その時に相手に対する「思いやりの心」を忘れてはならないということをボランティア経験を通して思い知らされました。そして看護という行為は「人のために行っているものであるにもかかわらず、最終的には自分に返ってくる、自分を看護して成長させてくれる」という実感でした。皆様もこのことを心に留めてください。皆様が専門家になっても、思いや

りの心をもって看護を実践することを通して、人としてさらに豊かに成長されることを心から願っています。

●本日皆様は卒業あるいは修了して本学の同窓生になります。同じ看護の道を進んでいく仲間として、一緒により良い看護を目指してさらに歩んで参りましょう。理想と現実の違いに直面するかもしれません。もし挫折しそうになったら、いつでも声をかけてください。迷ったらいつでも戻ってきて相談してください。臨床に出て、もっと勉強したいと思ったら大学院で学び直す方法があります。私も含めて本学の教職員一同がいつでも応援していることを忘れないでください。



●弥生の空が晴れ渡り、草木の彩りから春を感じるこの佳き日に、私たち第4期卒業生のために晴れやかな卒業式を挙げてくださり、誠にありがとうございます。また、ご多忙の中ご臨席くださいましたご来賓の皆様、濱中学長をはじめ先生方、並びに保護者の皆様に、卒業生一同心から御礼申し上げます。また濱中学長の式辞と内閣盛岡市長様、相馬岩手県看護協会会長様からお祝いとお励みのお言葉を賜りましたことに、重ねて感謝申し上げます。

●4年前の春、私たちは看護学生としての一歩を踏み出しました。看護職という夢の実現に、一層近づいた私たちは、大きな希望と不安の入り混じる中、入学式を迎えました。その喜びに浸る間もなく講義は始まり、初めて触れる専門用語や看護技術、提出課題などに追われ、挫けそうになることもありました。また、これらの日々のそばには、新興感染症の新型コロナウイルス感染症の流行もありましたが、そのなかで医療者として、感染を自分の前で食い止め、広めない、という責任感を養いました。先生方、職員の皆様の速やかなご支援により、私たちは多くの日々を学内で学ぶことができました。これらの日々は瞬間に過ぎ、本格的に病院での実習が始まった際は、実習に期待を寄せながらも不安でいっぱいでした。実習当日の朝まで友人と復習して臨み、経験を共有しながら実習での学びを深め合いました。私自身は、なんとかしたいという気持ちばかりで、うまくいかず悔しい

●最後になりますが、ロシアのウクライナへの軍事侵攻は2年が過ぎましたが収結の見込みはなく、イスラエルのガザ地区への攻撃も4か月以上続いています。多くの一般市民の命が犠牲になり、今この時も危険にさらされています。

●また1月に起こった能登半島地震の被災地では、まだまだ避難している方が多く、復興の兆しが見えない状況のように思われます。紛争や自然災害では予備力の低い子ども、女性、老人、障害者、病人が大きな被害を受けます。こういった人達を支え、援けることも私たち看護専門職者の使命であると思いま

す。

●自然災害はいつ起こるかわからないことですし、戦争の火種はいつ私たちの生活に襲いかかってくるかもしれません。常に社会情勢に目を向けることを忘れないでください。皆様の今後の人生においても良いことも悪いことも様々なことがあると思います。どうぞ、その時その時を人として看護専門職者として大切に生きてください。今後の皆様のご活躍をこころから祈念して、学長の式辞といたします。本日は誠にありがとうございます。

令和5(2023)年度 卒業生 答辞

看護学部 卒業生代表 久保 友花 さん

思いを何度もしました。看護学は人間と向き合う学問です。相手からの反応を受けて自分自身の弱みに何度も気付かされました。しかし、この経験を通して自分と向き合い、先生方や友人、家族に話を聞いてもらいながら、看護を見つめることになりました。臨床での学びは、何にも代え難いものであり、患者さんとその家族、指導者さんと出会い、個性に添って根拠ある看護を提供することの大切さを実感しつつ、実践できるまでに成長しました。保健師課程では、新たな視点で公衆衛生看護学を理解し、事業の実施と考察の段階まで経験することができました。人生のあらゆる段階にある人々への支援について経験を重ね、それらを地域全体の事業に反映させていく保健師の活動は奥深く、これらを丁寧に見て触れることのできる環境での学びは、私たちの目標を高めることとなりました。さらに、住民の方々の目線に立って捉えることは、住み慣れた場所です。その人らしく生活するために非常に大切であり、看護職における個性を尊重することの重要性に改めて気づくことに繋がりました。

●これまでの道のりは決して平坦ではなく、喜びに満ちた追い風ばかりではありませんでしたが、私たちはこの4年間をかけたえのない思い出として振り返ることができそうです。そこには、いつも私たちの涙も笑顔も見守り、支えてくださった多くの存在があったからです。どんな時も手を差し伸べて安心感

と勇気をくださった先生方、どんなことがあっても変わらず味方であってくれた家族、そしてなにより、掲げた目標に向けて切磋琢磨し合える仲間と数々の日々を過ごすことができたからです。人生の財産は友なり、という言葉がありますが、じっくり温め育んだ本学での出会いはとても貴重なものになりました。

●これから私たちはこの学び舎を離れ、さらに大きな目標を求めて旅立ちます。医療を取り巻く環境は今後も変化を繰り返すことでしょう。社会から求められ、果たすべき役割に適応していかねばなりません。今日までの経験を大切にしつつそればかりに頼らず、新しい場所で新しく学ぶことを積み重ねて歩み続ける必要があります。これまでに以上の大きな困難にも、日々を共にした思い出が勇気となって支えてくれることを確信しています。4年間で培った強みを最大限に活かし、本学が掲げるケア・スピリットをさらに育むことで、一人の医療者として社会に貢献できるよう、日々精進して参ります。

●最後になりましたが、今日までご指導くださった先生方、職員の皆様、快く実習を受け入れて学びの機会をくださった施設の方々、そして日々支えてくれた家族、お世話になった全ての方々へ深く感謝申し上げます。そして、岩手保健医療大学の更なる発展をご祈念申し上げるとともに、本学の卒業生として社会貢献に努めることをお誓いし、卒業生代表の答辞と致します。

令和5(2023)年度 修了生 答辞

看護学研究科 修了生代表 磯島 実奈 さん

●令和5年度岩手保健医療大学学位記授与式にあたり、看護学研究科修了生のひとりとしてここにお礼とご挨拶を申し上げます。

●今日は、学長濱中喜代先生をはじめとした教職員の皆様、ご来賓の皆様のご臨席のもとでこのような盛大な学位記授与式を催していただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

●私たちは、本学大学院の第二期生として入学し、それぞれ自らが取り組むべき看護研究の問いを見出し、向き合い、探究し

て参りました。私は「保健師と住民組織の協働」に関する研究を行いました。現在保健師は、激動の社会情勢のなか、複雑多様化した健康課題の解決に向けて活動しています。日々切迫した状況下で活動する保健師の助けとなるような研究を行いたい、そして私が現場での実践のなかで住民自身がもつ「変革の力」に気付くきっかけとなった住民組織にフォーカスを当てた研究を行いたい、という思いからテーマを考えました。研究を行う過程で、指導教員の鈴木

り子教授からは保健師のあるべき姿を、大井慈郎准教授からは、一から研究の方法と、いかに論文を執筆し、伝えていくのかを教えてくださいました。この二年間、指導教員の先生方をはじめ、多くの先生方や大学院の同期の皆さんと講義等でディスカッションさせていただくなかで、「保健師とは何か」を考え続けて参りました。修士論文を書きあげた今、その答えとなるヒントが見つかったように思っております。このことは、私にとってこれからの活動の糧となり、かけがえのない財産となりました。

●今日私たちは大学院を卒業し、研究者としての入口に立つこととなります。今後私は研究者として、現場で働く保健師に勇気を与え、住民と向き合った時に、研究をふと思いつき活用してもらえようような研究を行っていきたくと考えております。

●今後も、我が国の保健師・看護師を取り巻く環境は大きく変化し、私たちに求められる専門

知識や技術は高くなっていくことでしょう。しかし、本学の建学の精神である、「ケア・スピリット自ら進んでケアに向かう姿勢」の重要性はどんなに社会が変化しようとも、揺らぐことはありません。この岩手保健医療大学で学ぶことができた誇りを胸に、ケア・スピリットをもって社会に貢献できる活動を行っていきよう精進して参ります。

●最後に、これまで時間を惜しまず親身になって丁寧にご指導くださいました先生方、働きながら学ぶ環境を整えてくださった職員の皆様、研究の調査にご協力いただいた市町村保健師の皆様へ感謝申し上げます。そして、大学院での学びを応援し、心が折れそうになった時いつも励ましてくれた家族に感謝します。

●ご列席いただきました皆様の健康と、益々のご活躍を心よりお祈りするとともに、岩手保健医療大学の一層の発展を祈念いたしまして答辞とさせていただきます。

